地域包括ケアと高齢者の住まい

――その理念と役割――

高橋紘士 教授

国際医療福祉大学大学院医療福祉学分野教授、高齢者住宅財団理事長。1944年生まれ、法政大教授、立教大学教授などを経て、現職。有料老人ホーム協会理事、高齢者住宅推進機構理事、厚労省政策評価に関する有識者会議座長、東京都社会福祉審議会副会長などを兼務。厚労省地域包括ケア研究会などの他、国交省、総務省等で各種委員会委員歴任。著作として、「地域包括ケアシステム」「地域包括支援センター実務必携」（編著、以上オーム社）「地域包括ケアシステム」（分担執筆、慶應大学出版会）、「高齢者の権利擁護システム」（共編、勁草書房）「介護保険のマネジメントシステム」（共著、医学書院）など多数。専攻は地域ケア論、介護保険論、福祉政策

豊かさの逆説としての高齢化～ケアの根底にあるもの～

第45回「ケアと経済社会の関係考」

有吉佐和子の「恍惚の人」のなかに「茂造（主人公）という自然淘汰に逆らった存在」ということばがある。今日の認知症をはじめとする「老人性退行疾患」の特性を要約した表現である。

そもそも、自然状態では老いという現象は存在しない。生殖可能年齢を過ぎた生物は生存できない。人という種のみが生殖可能年齢を超えて生き続ける可能性が生じたのは、人間の文明的営為の結果としての「老い」の発生以来である。

農耕社会の成立のなかで家族システムのなかで老いた存在である家族員を扶養するという慣行が成立してから人は老いることができるようになった。しかし、飢餓が起こると扶養しきれない老人を捨てる習慣が存在した。これが「楢山節考」などで知られる棄老伝説である。このような棄老伝説は豊かな社会の到来で過去の記憶といえるのだろうか。

ヒトが形成する社会は文明としての経済システムを発展させるなかで、依存人口を扶養するシステムと慣行を発展させてきた。産業社会の登場はそのあり方を根本的に変化させた。

産業社会はヒトを労働力として効率化するために家族と地域への依存から解き放ち、自由な労働力移動を強制し、工業生産に投入することになった。そのなかで、ヒトは家族システムによる保護から離脱することになった。そのなかで発生したのが、産業社会形成期における大量の貧困問題であった。

これは自由主義を標榜した粗暴な資本主義初期の時代におけるエピソードであった。

そこから豊かさの均霑とともに、依存人口の扶養システムの再形成が行われることになる。これが後に福祉国家の始まりとなる、社会立法による依存人口の保護制度である。依存状態の原因となる事象に対して、様々な社会制度を構築してきた。貧困救済のシステムから始まり、所得保障の仕組みや、医療保障の仕組みの構築がそれである。

自由競争原理にもとづき自立と能力主義を原理として産業化の結果として成立した豊かな社会のなかで、産業化に成功した国々では人口高齢化が不可逆的に進行した。これを経済学者の馬場啓之助は「資本主義の逆説」と呼んだ。

自立を原理とした経済の成功の結果、膨大な依存人口としての高齢人口が出現するというのはまさに逆説としかいいようがない。依存人口を扶養するしくみを社会的ケアとして組織化せざるを得ない事態が発生したのである。

ところで、ケアという言葉の語義はギリシャ神話のクーラの神話である。クーラ（配慮というラテン語）がヒトを形作り、その所有権をこの世の支配神ユピテルと大地の神テラと争ったとき、時の神クロノスの裁定で、生きている間はクーラの支配下におかれることになったという神話は、今世紀最大の哲学者といわれるハイデッガーが「存在と時間」という書物で引用した。ケアの語源を語るときに、必ず引用される寓話である。

この意味は人間の存在そのものがケアと必要とするということである。

ケアを担う部門が今日では、経済社会で大きな位置を占めるようになった。この部門をどのように考えるかは、経済社会の姿を考える上での試金石になっている。

新自由主義経済学者はケア部門が経済社会の効率性を阻害する存在とみなしているようである。この論理を突きつめると、現代的な形態での棄老システムの制度化を主張することにつながる。

まさにこの点の認識が現代の争点である。ケアを排除した「強い経済」と「強い国家」が果たして、膨大な依存人口を抱えた我が国の経済社会における「善き社会」の姿としてふさわしいものであるのだろうか。

2014年の年頭に当たり課題提起としたい。